



### 「森井先生のこと（その3）」

真崎隆治

文学部長の時代か、もうすでに学長になられてからのことか、私のお粗末な記憶装置ではいずれとも判然としないのであるが、ともあれ連合教授会で森井先生が発議されたことなので、学長になられてからのことであろう。当時、学長選挙は教職員全員の投票により行なわれていた。それを、学長選挙は大学の教育理念に関わる事柄であるから投票権を教員に限定しよう、という提案である。もちろん反論が出た。職員だから大学の理念形成に参画できないというのはおかしい、とはもっともな意見である。教職員全員が明学の教育理念について考え続け、意見を交わし、深めていくことは理想である。しかし現実には必ずしもそうではない。教員と職員の票をまったく同質のものとして扱うには無理であろう。もちろん教員のなかにも教育の理念をさして考えない人がいるであろうし、職員のなかにもそれを真剣に考える人がいるであろう。しかし職分の相違はそうしたことを越えて大きい。森井先生の提案は、70年前後の大学紛争時に妥協的につくられた選挙制度を原点に引き戻そうとするものであった。結果として原案に多少の修正を加えたものが可決されたのであるが、形だけみれば職員の既得権を奪うこ

とになるから、勇気のある提案といえた。

それはよかったのだが、森井先生はその中でいわば勇み足発言をなさった。教員と職員の職分の違いということを経験的に語ろうとして、教員が運転手なら、職員は切符切りだと言われたのである。電車を動かすのは運転手であるというのだ。これはちょっとした物議をかもした。私にしてももう少し穏当な言い方があるとは思った。しかしよく考えてみれば、「切符切り」といわれて色をなした人は、現実には働いている切符切りの人を軽視していたことになるのではないか。森井先生は職分の違いという事実を語られたのであり、人格が違うということは言われていないのである。

「盆のような月」というのを、球である月を二次元化したと云って怒る者がいようか。比喩は一面しか語らないとはかつて北森嘉蔵先生に教えていただいたことであるが、森井先生は比喩をもって事の本質にずばりと切り込み、論は明快であった。

ところで、「ゆうべはぜんぜん寝なかったのです」とは、森井先生からいくどとなくお聞きした言葉である。翌日の会議などでどのように相手を説得しようかと寝もやらで考えるからである。誤解しないでいただきたいが、森井流の言葉遣いというと、「どうしてやっつけてやろうか」である。ここには真剣さが遊びの精神のなかではつらつと息づいている。ホモ・ルーデンスというのは私の好きな思想だが、これまで先生について書かせていただいたエピソードのどれもが、この精神をまさに具現化したものといえよう。この余裕ある真剣さがすばらしい。そして、「やっつけ」ようにする思いは、権威ならざる権威によって人間の尊厳とか人間への愛が踏みじられようとするとき、先生の内面からむらむらと立ちのぼってくるのである。先生が専門とされたフランスのルネサンスは、「神にとってなにであるのか」という問いから、「人間にとってなにであるのか」という問いへの転換の時代であった。それは神の名を出せばいかなる無理もまかりとおる時代から、事柄を人間の問題として捉えなおして考えようと

する時代への転換であった。天動説から地動説へ、形而上学から自然科学的思考へと、近代の合理的精神がそこに誕生しようとしていた。こうした時代の流れを汲んだフランス・ユマニスムの精神を深く学ばれた先生であれば、権威の名を騙って権力をほしいままにするもの、当時でいえば「教皇主義」で代表されるようなものを憎まれるのは当然であった。そして教皇主義は 16 世紀ヨーロッパにかぎらず、いつの時代、どこの土地にも、姿かたちを変え、名を変えて存在しているのである。森井先生の戦いはこうした現代風に身をやつした教皇主義をやっつけることであった。そのハイライトとも言えるものが大木英夫氏との論争である。(続く)

(まざき たかはる

所員・教養教育センター教授)